

女性の視点から考えた原子力

WIN-Global/WIN-Japan 会長

日本原子力発電（株）広報室調査役

小川 順子



原子力は、現在、エネルギー安定供給と環境面の両面に優れていることから、基幹エネルギーに位置付けられているが、男性が圧倒的に多い原子力の世界で女性の視点から見た原子力をどう考えるか、またどのように広報・理解活動を進めるかなどについて原子力に携わる女性の世界組織である WIN-Global の会長に就任された小川順子さんにお話を伺った。
(聞き手＝広報部 金子 博行)

1. 女性と原子力

—— 一般の人は、原子力は怖いものであるというようなマイナスイメージを抱きがちですが、特に女性はその傾向が強いと言われています。小川さんはこのことについてどう思いますか。

はい、世論調査の結果では、あきらかに女性の方が、原子力に対する否定的な考えを持つ傾向が強いですね。その理由を考えると、女性は、子供を産み育てる性であるということがあると思います。子供をあらゆる危険から守らなければという思いが強く、その安全を脅かすものに対し本能的に拒否反応を示すのではないのでしょうか。また、生活の中心が比較的 안전한家という場で営まれるので、安全であってあたりまえという考えが強いということもあると思います。

—— そのような女性に対してどのように原子

力について理解をしていただくのか。女性ならではの進め方などはありますか。

私自身も女性ですから、自然体で女性に接すればよく、特に「こうしなければ」という意識はありません。多くの方は、性別に限らず「原子力は難しいもの」というように見えていて、自然と原子力の周りには、垣根を作ってしまう気がします。ですから、垣根の中で何が起きているんだろうと、知らないがゆえに不安が大きくなるのだと思います。だから、私達はなるべく垣根を取り払いたいと思っています。そのためには、私は話し合うことが一番大切だと思っています。簡単に言えば、「おしゃべり」し合うってことですね。女性は「おしゃべり」の達人が多いです。ざっくばらんな話し合いを通じて、垣根を低くしていくことで、信頼の第一歩に繋がると思っています。

2. WIN-Japan、WIN-Global について

— 原子力の仕事をする女性のグループとしての WIN-Japan を立ち上げられたキッカケは。

WIN-Japan は、WIN-Global という世界組織の中の国別組織です。まず、1993 年に WIN-Global という世界組織ができました。きっかけは、チェルノブイリ事故後、食品汚染や牛乳の汚染など暮らしに密着した部分で、原子力発電所の事故による被害が出たので、ヨーロッパでは原子力反対活動が活発になったということです。「原子力は嫌だ」というのは、食と子供の健康を脅かされた女性の声だったと思います。それに対して、ヨーロッパの原子力や放射線利用の分野で働いている女性たちが立ち上がりました。女性の不安は、女性のアプローチで解消する方が効果的と考えたんですね。手を組んで、一般の女性たちに原子力を理解してもらうため活動を始めました。それが WIN の設立へとつながったのです。

そのニュースが日本にも届き、私達も一緒に活動していくうちに、世界で三番目の原子力大国の日本に、WIN の国内組織がないのは、淋しいな、恥ずかしいなという気持ちになりました。仲間の中で「WIN-Japan を立ち上げたい」という希望が強くなってきた折に、当時、日本ニュークリア・フュエル (JNF) というウラン燃料製造会社に勤務していた私に、ある日、日本原子力発電 (株) (原電) から転属のお話があったのです。WIN-Japan 設立の可能性について伺ったところ、前向きにとらえていただいたので、そのこともあり、原電に入社しました。そうして、1 年余りの準備期間を経て、2000 年 4 月に WIN-Japan の設立に漕ぎ着けたのです。

— WIN の活動目的および会員などについて

教えてください。

WIN の目的は 3 つあり、1 つは女性や子供達に対する原子力理解促進活動です。2 つ目は、会員がそれぞれの職場や研究所でより貢献できる実力と人脈を身につけるための会員自身の資質向上です。3 つ目は、国際組織を持つ女性グループとして国際交流を深めることにあります。

WIN は正会員、賛助会員および準会員で構成されており、電力会社、原子炉メーカー、燃料メーカー、国の原子力機関、民間の研究所など約 40 の企業、機関に所属している方が会員となっております。具体的な職種としては WIN-Global は技術系が 8 割を占め広報系は 2 割程度なのに対し、WIN-Japan ではこれが逆転し広報担当者が圧倒的に多いといった状況です。

— WIN-Japan の具体的活動は。

女性対象の活動としては、先ほども触れましたが、ざっくばらんに話し合える場を継続的に持つという活動に一番力を入れています。そのプロジェクトを「女性交流会」と言っていますが、時と場所によって、キャッチフレーズを変えています。例えば「ホンネで話そう原子力のこと」などのイベントテーマをつけ、原子力をきちんと見据えて、女性達に来ていただくようにしています。実は、一般女性を対象にした交流会で「原子力」を正面で捉える、というのは、大変勇気のいることなんです。普通の女性は、このテーマで引いてしまう可能性があるかもしれませんから。でも私達は、原子力の仕事をしている女性達です、と明るくお話しします。自分の専門業務を生き生きと語るということだけでも参加者に新鮮さを感じてもらえます。

WIN としては、原子力というエネルギー



の価値を原子力で働いている私達の人間性を通して感じ取ってもらいたいのです。最初の出会いをきっかけとして、2回、3回とWIN会員と触れ合って、心を通わせるうちに、たとえば、原子力の事故やトラブルがあっても、応援団になってくれる人もいます。何も関心がなかった人が応援団になってくれる、そこまでできるようにするのがWINのゴールだと思います。

今年は、11月に全国から30人近くのWIN-Japanメンバーが九州に集合します。一般の参加者の方々はまずそのことに感激してくださるようです。ひとつのテーブルで8人から10人ぐらいの中に、WINメンバー2、3人が入り、テーブルトークで色々な話をします。普通、原子力の説明会というと大公聴会形式が多く、気軽に発言できる雰囲気ではないですね。でも、みなさん、心に言いたいことが一杯あるんです。そういう今まで声にならなかった声をお聞きすることがすごく大事だと思います。

WIN-Japanの目的の2番目に、会員の資質向上ということがあります。会員は、女性交流会や国際会議などを通じて、マニュアルでは対応できない人との会話、対話の技術を身につけ、また一緒にひとつの目的に向かって仕事をする中で、自分の役割に対する責任とそれを全うする達成感を感じることが出来ます。

こうしてWINでただ単に原子力の広報活動だけじゃなくて、それを通じて自分も育つということも目指しています。

— 今年から小川さんは世界組織であるWIN-Globalの会長にも就任されました。会長として今後の活動についての抱負などを教えてください。

本年5月の第12回WIN年次大会で、世界の会長に推挙されてお受けしたのですが、これは、ひとり私が認められたということではなく、WIN-Japanの活動が世界的に認められたということだと思います。とりわけ去る5月の日本での大会は、WIN-Japanメンバー全員が力を合わせて成功させたのですが、その時の運営が非常にシステムティックに行われ、きめ細かい配慮が行き届いていたことが、世界の会員の心に、次は日本にリーダーシップを取ってもらいたいとの信頼に繋がったと思っています。

今回、初めてヨーロッパ以外の国から会長に就任したのですから、アジアの利を活かして、WINの存在や活動をアジアのいろいろな国に広めていきたいと思っています。フィリピン、ベトナム、パキスタンなど、現在会員登録がある国にまず国別組織を立ち上げてもらいたいと思っています。また、中国の参加を促すことも課題のひとつです。

世界的には、インターネット等を通じ、様々な発信を行っていききたいですね。Globalのホームページを開けると、New President Commentなどが掲載されています。それから今回の美浜事故のWIN-Japanからのステートメントも事故の翌日には出しました。米国のサリー発電所が同様の事故を克服して、現在全米でもトップクラスの発電所になっているということに触れ、日本の原子力もこれを教訓にして、さらに

安全性を高めていく努力をしていくことを WIN-Japan としてはサポートしていくんだ、というメッセージを世界に向けて発信したんですね。次の日ですので詳細はわからない状態ですが、私達の思いをすぐに知らせるべきだと思って表明しました。するとすぐに、各国のメンバーから好意的な反響が返ってきて、大変励みになりました。

その他、様々なイベントや活動を通じて、条件が許す限りフットワーク良く活動していきたいですね。

3. 原子力のこれから

— 「原子力のこれから」をどのようにお考えかお聞かせください。

私は、原子力に対して、基本的に明るい未来を描いています。私の信念としては、原子力は、不可欠なエネルギー源であるということは揺るぎません。もし、原子力をなくした場合、エネルギーセキュリティはどうなるのか、温暖化を抑制するために他に有効な手立てがあるのか、エネルギー問題で世界的にどんな貢献ができるのかなど、日本にとって回答できない問題が多すぎます。バックエンド事業に多額の費用がかかることが話題になりましたが、今でも急激な石油高騰により、それ以上の国民財産の損失が現実問題となっているわけで、コストのみで考えられるほど、単純ではないのではないのでしょうか。

原子力に携わる仕事をしている私の原点は、「エネルギーがつくられて、女性たちに自由が来た」ということなんですね。今、世界の12億の人々が飢え、25億の人々が水やエネルギー不足で苦しんでいる。その人々には、私たち日本人があたりまえに

享受している自由がないんですよ。私はそういう人々もエネルギーが必要量使えて、幸せになることが世界平和につながると思っています。世界が平和になれば、日本ももっと住みやすく、より幸せな国になるでしょう。そのためには、技術力と経済力のある日本のような国は、原子力を進め、開発途上国に安く化石燃料を提供するべきだと思っています。例えば、エネルギーや電気が豊かになると出生率も低下するという話もあります。なぜなら、教育や情報が高度になり、労働が機械化され、人々が多産に対してコントロールするようになるからです。2050年には90億と予想されている人口増加問題に対し、非常に平和的に対処できるのです。

それから再処理のお話ですが、プルトニウムの軍事転用が心配されていますが、日本は核兵器非保有国で、唯一再処理事業を国際的に認められている国なんです。なぜなら、平和憲法があり平和利用に徹するという非核三原則があり、50年の歴史の中で国家と原子力と平和が立派に機能してきた実績があるからです。日本が原子燃料サイクルを平和のサイクルとして確立することは、日本の誇りになることではないでしょうか。原子燃料サイクルをどうするかで、今、議論が進んでいますが、私個人としては、一日本人として国の何を誇りにするか、という視点で、原子燃料サイクルを考えたいと思っています。

先の WIN 世界大会で、フィンランドの方が言った言葉が印象的でした。「未来の人々は、21世紀に人類が原子力という技術を残してくれたことに感謝するだろう。」この言葉を締めくくりに贈りたいと思います。

(おがわ じゅんこ)